

教員推薦図書 2023年6月

推薦教員	健康・スポーツ心理学科 関谷 大輝 先生	<p>【推薦コメント】</p> <p>あなたがもし、「血で血を洗う」ような悪い組織に属していて、「首を洗って待ってる」などと脅されているなら、束の間の「鬼の居ぬ間の洗濯」を目指すより、そんな組織からは早々に「足を洗う」ことを勧めたい。もしくは、あなたが慎ましく生きる日常に疲れたなら、「芋を洗う」ような海水浴場より、「心が洗われる」ような美しい大自然に触れに行くといい。</p> <p>とまあ、慣用語の羅列はこのくらいにしておくが、事程左様に私たちの人生は「洗うこと」にまみれている。私たちは日々、「手を洗い、頭を洗い、身体を洗い、食器も服も洗って」生きている。洗えない人生なんて嫌だ。つらすぎる。</p> <p>そこで本書、『洗う文化史』である。私たちにとって身近なルーティンと化している「洗う」という行為について、歴史、文化、民俗、あるいは宗教的な観点から、興味深い知見を数多く紹介してくれる。</p> <p>ここで、私がこの本を読んで衝撃を受けたことをひとつ。なんと今からたった100年ちょっと前の日本では、入浴頻度は下手をすれば年に○回程度、そして女性が髪を洗うのは○年に1回というのも普通だったらしい（月に3度も髪を洗えば人から笑われたそう）。この○の中に入る数字の正解は本書の第3章に目を通してもらうとして、現代の入浴や洗髪の頻度は、100年前の日本人から見れば「大爆笑」ものなのである。でも私は毎日風呂に入りたいし、温泉にも頻繁に入りたい。大爆笑は甘んじて受け入れよう。</p> <p>「洗う」という行為や「きれい」という心理の歴史と変遷について、多くの視点から捉え直すことができる興味深い本書。私は温泉を研究する身でありながら、知らなかったことばかりである。本書を読んで「顔を洗って」出直したい。</p>
書名	〈洗う〉文化史 ～「きれい」とは何か～	
著者名	国立歴史民俗博物館, 花王株式会社 編	
出版社	吉川弘文館	
請求記号	383.6 / Kok	
資料ID	901125009	